

筑波大学日本文学会会報

第30号

2006年2月

厭離庵拝観(犬井善壽)……………	1
犬井善壽先生御退職にあたって(稲垣泰一)……	3
日本文学会だより……………	5
研究室だより……………	7
新刊紹介……………	11
卒業生だより……………	13
日本文学会教官学生名簿……………	17

厭離庵拝観

犬 井 善 壽

念仏寺から清涼寺へ向かう途中、厭離庵へ入る路地の入り口に「本日参観できます」という看板を見つけた私は小躍りした。一昨年の秋休み、日本文学実習で比較文化学類三年生諸君五人と嵯峨野を歩いた時のことである。

四十余年前、大学一年の夏、京都を歩き回った。滋賀県育ちの私にとって京都は面白い物に行く町でしかなかったが、国文科に入学したからにはと、京都の文学散歩、といえば聞こえはよいが実は観光見物を試みた。実家に戻らず、宇多野のユースホステルを拠点に、六日間、大原・鞍馬・清滝・木津・八幡・大原野など洛外を巡った。一日、嵯峨野を歩いた。常寂光寺を拝観したからと、共に定家山荘跡という件の決着がついていない厭離庵を訪ねたのであるが、藪の中の細径の奥の厭離庵は、開いた門に一本の竿が渡され、「参観お断り」と書かれた小さい木札が掛けられていた。身を乗り出して邸内を垣間見る他なかった。後髪を引かれる思いでその門を後にした。

その後、幾度も京都を訪れた。大学二年の秋には飛鳥から京都への文学史実習旅行があった。院生時代の実習旅行では近江との境を

延暦寺根本中堂から横川中堂まで歩いた。陽明文庫等の文庫や京都大学等の大学図書館へ典籍の拝見に伺った。京都で開催された学会に何度か参加した。横浜国立大学在任中、また、筑波大学へ移ってから、学生諸君や院生諸君の京都見学旅行に何度も同行した。大学の外の『平家物語』読書会に招かれ、有志の御婦人がたの「京都平家物語の旅」なるものに随行したこともある。現在でも、実家へ帰省した折には、ちよつと大きい買い物はやはり京都へ出る。市内の古典籍商や古書店は帰省の度に一巡りすることになっている。時間に余裕ができると、文学ゆかりの地を訪ねる。文学の舞台になった地であることが偶然わかることも再三である。文学と深く関わる嵯峨野へは何度も脚を延ばしたが、厭離庵は例の門の外から邸内を伺い見るばかりであった。

普段は公開されていない厭離庵のお庭や邸が、その日は、歌会があるとかで、拝観できたのである。

晩秋の紅葉が美しかった。散った紅葉葉の置く苔の緑が鮮やかであった。定家をはじめ有名無名の歌人の歌碑や石塔が幾基も点在していた。定家が硯の水を取ったと伝えられるという小さい井戸は石造りであった。歌会が終わった直後に階上に上った建物は古くはないが、掲げられている幾点もの古筆や新写の額と軸とが私の眼を喜ばせた。床の間に飾られた『百人一首』の絵札と取り札は売り物で、予想とは二桁違う価格札の数字に学生諸君が驚きの声をあげた。私は、その値段もさること乍ら、京都の職人さんたちの伝える伝統工芸の技に目を見張った。

四十余年目にしてようやく願いが叶った厭離庵拝観である。何年もかけて多くの写本や版本を検討してもその本文に十分には納得の行かない所のある作品について、拝見した念願の写本に適切な本文を見出すのに似た快い興奮を覚えた。一緒に厭離庵を拝観した諸君の卒業と同時に私も筑波大学を去る。二十七期もの学生諸君の受講と厚誼に御礼申しあげる。厭離庵と常寂光寺いづれが定家山莊跡であるのか私には分らず、古典の良い本文を探る四十余年の文献渉獵の決着も私には分らない。先輩諸先生や同僚諸氏に変わらぬ御教導を御願ひ申しあげる。

昨年十月、時代祭りを見た翌日、家内と嵯峨野を歩いた。厭離庵は、その日は板戸の門に固く閉ざされていた。

犬井善壽先生御退職にあたって

稲垣泰一

犬井善壽先生が平成十八年三月末日をもって筑波大学を定年退職される。はやそのような時期を迎えることになったのかと、つくづく時の流れの速さに驚かされる。と同時に、時代が確実に移ってきたという現実を思いを馳せざるを得ない。

ここ数年、大学院日本文学領域では池内輝雄先生、石埜敬子先生が退職され、今度は犬井善壽先生の番である。犬井先生は昭和五十四年四月に筑波大学に赴任されたので、足掛け二十八年もの長きにわたって筑波大学で教鞭をお取りになり、多くの学類生・大学院生を指導してこられた。まさに日本文学領域における大黒柱である。この筑波大学日本文学会は犬井先生が中核となって、学類生・大学院生・教員の研究発表を主とする相互の研鑽と親睦のために設立されたものである。先生御自身も毎年一回は研究発表をなさって、研究のお手本を示された。ほぼ月一回の例会にはよほどのことがないかぎり必ず御出席され、厳しい御意見を述べられて、大学院生諸君を震いあがせるとともに、温かく包み込まれる指針を与えてくださった。先生の存在がどれほど日本文学会に緊張と心の和みをもたらしたか、計り知れないものがある。

実は犬井善壽先生は私の大学時代の一年上の先輩である。学部時代から大学院時代、それ以後今日に至るまで、振り返ってみると、かれこれ四十年近くも親しくお付き合いさせていただいている。まことに長い間お世話になり、いろいろ御教示を仰いだものである。感謝せずにはいられない。共に中世文学を専攻するという関係で、演習授業、研究部会（東京教育大学では各時代ごとに部会と称する研究会があった）で御一緒し、勉学面、研究面、その他さまざまの点で教えを受けた。その当時は、前後に中世文学を専攻する学部生・大学院生が多数いて、犬井先生は先生方と先輩、後輩の仲介役や世話をいつも買って出てください、中世文学部会の維持と発展に努めてこられた。現在でも中世文学研究者の集まりや同窓の会が催される折には、犬井先生がそのまとめ役をなさるのが常である。このように大変面倒な役回りをなさっているにもかかわらず、先生はいつも「自分は縁の下の力持ちでよい」との御発言をなされ、際立って前面にはお立ちにならない。まことに「陰徳」の士であられる。

犬井善壽先生の学問研究は軍記物語と中世私家集の本文研究が主体である。その研究たるや、圧倒されるほど多くの諸本を博搜して

調査され、綿密な本文考証に裏打ちされて成されるものばかりである。その立論にあたっては、証明可能な事柄を明確に示され、決して安易な推測や仮定をなさない。ストックなまでに厳格である。その姿勢からは学問研究はかくあるべしとの強い信念と、研究に寄せる深い情熱がうかがえる。

このように厳しい反面、温厚で篤実な先生が筑波大学を去られることは、日本文学領域及び日本文学会にとってこの上ない痛手である。しかし、これもへさだめとして甘受せねばならない。犬井先生は学生時代から頑強な体軀であられたが、最近は時折体調を崩されることにおありになる。心配である。今後はくれぐれも御身体専一に過ごされ、ゆつたりと研究をお進めなさるよう祈って、お別れの辞とする次第である。